
セーブをお望みですか？

夏一陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セーブをお望みですか？

【Nコード】

N6528Y

【作者名】

夏一陽

【あらすじ】

魔法学校卒業したての少女マジセブはセーブ士アルゼナに憧れて、超難解な魔法であるセーブ術を武器に、稼げるギルドメンバーを目指す。ちよつとSな主人公マジセブと、熱血漢？のセロイナやDMのジジイらと一緒に楽しく冒険しよう。

初仲間

風のように大地を走り巡り、闇のなかの一つの光明となる伝説のセーブ士アルゼナ。

歴史に名を残そうと勇者を目指した者たちは、伝説の武具や秘宝より、まず彼女を探し求めたという。

彼女が唱えるセーブ術は神速のごとく、そして場所を選ばない。海の上を走る船の上だろうが、空を滑空するドラゴンの背中だろうが、彼女アルゼナは勇者とその仲間たちを記録し続け、安全な旅を確約したのだった。そんなアルゼナ様に、私は子供のころから憧れていた。

学校の課目にはないセーブ術習得への道を歩み、白魔術だろうが黒魔術だろうが、なんだろうがかんだろうが、そんなものは投げ捨てて、学校生活の全てをセーブ術に捧げた。剣術のなんとかスラッシュだろうが、なんとかコンボだろうが、その間もずっと、教習生のセーブだけをしていた。

やがて学校では『セーブだけスゴイ』と指差されるようになり、あだ名を『マジセブ』とつけられた。マジすごいセーブの略らしいが、内心馬鹿にされていることは私も知っていた。

私が唱えるセーブ術はロバの歩みより遅く、仲間を危険に晒すことさえあったからだ。

でも私は、いつかこのセーブ術が世界を救うと信じている。

ガコッ！ という音で目がさめると、頭からじわじわと鈍い痛みが伝わってきた。

「いったーい……」

頭を触ると、やっぱりコブができています。絶妙なバランスで荷馬車の壁にもたれて寝ていたのだが、バランスが崩れて底板へ盛大にぶつけたみたいだ。

陽が登り始めて、出発の朝とは景色が随分と変わっていた。道は今までのあぜ道と違って石畳になり、延々と振動が続く。私の横では麦の入った袋が荷車の上を踊るように転がっていた。

「あれが、ユーリエスよ」

私が目覚めたことに気づいて、御者台の叔母が振り返った。荷台に立ち上がって前方を見ると、今まで見たこともない大きな壁が青空の下にそびえていた。

ユーリエスは石壁に囲まれた街で、その外観はまるでお城のように見えた。この地方では最も大きく、人の数も広さも私がいた村の何倍も大きいだ。そして何よりも魔物を征伐する役割を担う、重要な街だ。「この街が……ギルドの街……」

「そうよ。ギルドは街の中の一番大きい建物だからすぐに分かるわ。叔母さんは、商会に立ち寄っていくけど、どうする？」

「わ、私は、もちろん、ギルドに行つてきます！」

「大丈夫？ 若い女の子が一人で行くには少し物騒じゃない？」

「平気です。別に酒場に行くわけじゃないんですから」

「……。とりあえず、馬車を商会の倉庫に連れて行くから、もう少し乗ってなさい。あと、ユーリエスでは街の西の宿屋を使っているから、遅くても夕暮れまでには帰ってくるのよ」

「わかりました」

叔母はまだ私のことを心配しているようで、宿屋の場所と叔母が昼間に商売している露店の場所も事細かに教えた。

商会の倉庫に馬車を入れると、叔母はいくらかお金を渡してくれた。さすが土地をもっているだけあるな、などと感心していると、手にズシリと重量感のある金貨が3枚置かれる。

「十夜ぶんの賃金よ。ずいぶん働いてもらったからね」

しばらく私は、初めて触れる金貨を凝視した。表面にはフォーレンという名の勇者の顔が彫られている。アルゼナ様と共に、最初に魔王を倒した勇者だ。裏面には、アルゼナ様に従えたドラゴンロギネスの姿がある。この国で最も価値のある硬貨だ。

「そ、そんな……。村では寝泊りして、ここにまで連れてきていただいて……。それだけで十分です！ 賃金なんて……」

「……先立つものがないと困るでしょ？ それに、これは私の投資でもあるの」

「投資……ですか？」

「あなたは立派なギルドメンバーを目指しているんでしょう。そうしたら、格安であなたに依頼を受けてもらうわ」

女盗賊のように鋭い眼光を放ち、叔母はにやりと笑った。

「本気ですね……」

「それはそうよ。私も商人をやっているからね。だから、これは投資」

「じゃあ、期待してください。良い投資だと思いますよ」

そう言って互いに笑いながら、慌しく馬車が入りする倉庫を後にする。歩きだすと曲がり角で叔母が呼び止めた。

「でも、無茶はしちゃだめよ。大事な姪なんだから」

私は笑顔で答えて、ギルドへ向かった。

ギルドは各地から集まった多種多様なスキルをもつ人々が、地域の問題を解決する目的で運営されている。もちろん、ただ情報を集めるためであったり、ギルドに依頼できるほどお金がない人が来たりして、各人それぞれ、ギルドの定義は曖昧だ。

叔母と一緒にいた村では、酒場がそういった機能を部分的に担っていたが、人も依頼も規模が大きくなると問題を解決するための専門の集団が必要になるのだろう。大きな街には必ずと言っていいほどギルドの施設があるそうだ。

街の中央にある一番大きな石造りの建物を前にして、私は一息ついた。実際に目の前にすると、ギルドは中々の迫力がある。

入口は広く開け放たれていて、多くの人々が出入りしている。その横にはギルド創設者の石像が入口を通る人々を清々しい顔で見下ろしていて、なんだかむさ苦しい、勘違い男子に見えなくもない。

中は部屋ではなく集会所のような屋根つきの広場になっていて、壁にはびっしりと掲示板が備え付けられていた。そして掲示板の前には依頼を受けるための長机が置いてあり、ギルドのメンバーは受けたい依頼が見つかる、ギルドブックを出して正式に依頼を受けることができるようだ。

まずギルドでやることはギルドブックを作ること。これがないとギルドの一員とは認められないし、なんといつても依頼を受けることができない。

私はさっそく、ギルドの隅にある総合窓口に向かった。

窓口にはヒゲともみ上げの区別がつかない、そしてかなりムキムキ系の、ジョブクラスで分けるなら戦士に該当する男性がいた。

「あのう、ギルドブックはここでもらえるんですか？」

「はい。こちらで、承っております」

意外にも丁寧な言葉づかいに、一歩おののく。

「じゃあ、ギルドブックくださいっ」

「それでは2万マルいただきまーす」

「……高っ！」

思わず、さらに一歩おののいた。現在の私の有り金は、叔母からもらった3千マルだけだ。しかしそれでも、宿屋に三泊はできるはずだ。

石像のように沈黙してしまった私に、窓口の男性は見事なセール

スマイルを見せる。

「当ユーリエスギルドのブックは、他国のギルドでも使用することができるグローバルスタンダード仕様となっております。また、紛失してしまった場合でも、再発行時に過去の達成依頼内容を復元することも可能です。ご存知かと思いますが、ユーリエスギルドブックは身分証明にも使われるほど、正式なものでして、こういった正式書類の手続き上、申し訳ございませんが、どうしても高額なお値段となっております」

欲しいっ！　いま私に必要なものはこれだ！

ギルドブックに付いてきた様々なオプションに感動して、心の中でそう叫んでみたものの、これ以上どうすることもできず一礼して窓口を去った。

2万マル……　かなり高額だけれど、叔母の家に居候してフリーな依頼、つまりギルド経由でない依頼をこなせば案外いけるのかも。

お金を集める手段を考えながらギルドを出ようとすると、後ろから懐かしい声が聞こえてきた。

「あーっ、マジブーじゃん！　キヤー！　すごい久しぶりやん！」

振り返ると、同級生のセロイナが走ってきて、私の手をとった。

「キヤー！　びっくりしたー！　セロイナがいるなんて！」

「こんなところで会うなんて、本当、すごいわぁ」

セロイナは格闘課で私の魔法課とは全く違うクラスだったけれど、セーブ術の術式をみて興味をもったらしく、それから互いの課目で習ったことを教えあったりしながら自然と仲良くなった。

行動が予測できない、まるでアメンボのようなセロイナの性格は、勇敢であるようでもあり無謀でもあって、私の慎重な性格を合わせて事に臨むと、たいてい上手くいった。それを互いに良く知っているのか、頼ったり頼られたりしながら、やがて親友といわれるぐらいい関係が深くなった。

卒業のときはもう二度と会えなくなると思つて、肩を抱き合つて泣いたけれど、こんなに早く合えるなんて、なんだかちよつと恥ずかしい。

小麦畑のような金色のショートヘアに、長い眉とぱっちりとした目で相変わらず活発そうに見える。服装も袖のない軽い上着と、膝丈までのズボンに腰元で大きめの布を結んでいて、セロイナのしなやかな体を強調している。

「マジセブ。今、じつのところ、ヒジョーに困っているんよ。城の入団試験に落ちてしまつて、このギルドに入ろうと思つてたんやけど、そんなためには『ぎるどぶつく』ちゅう物がいるらしくてなあ。それが高いのなんのって……」

「あ、それ、私も同じ境遇」

「えっ！ そうなんかあゝ。マジブーはギルド一筋やったから、もう持つてるかと思つたわあ」

セロイナは失意の表情を浮かべて、肩をおとした。

「もし私が持つてたら、どうしたの？」

「いやあ……大きい声では言えんけど、偽造しようかなあつて……」
「偽造！？ そんなの無理に決まってるじゃない！」

「しいーっ！ いや、さつき見てたら、依頼を受けるときなんか適當。あんなん、判子押してポンポンポンやで。分からんよ！」
「いやいや。それはやめときなさい。あの人たちも、偽造かどうか見ればすぐに分かるはず。というか、それができるほどギルドブツクは簡単な作りになつてない」

「そうなんかあゝ。やっぱり、だめかあ」

「どっちも目的が一緒なら、パーティを組んでフリーな依頼をやつていこうよ。報酬は半分ずつになるけど、お互い初心者だし、一人でやるよりは効率がいいかも」

「せやな。互いにまつたく違う分野やし、弱点を補えあえるしなあ」
私はここでセロイナと偶然出会った瞬間、パーティを組みたいと

思っていた。この先のことが不安でいっぱいだった私の心の大きな支えになるし、信頼できるパートナーだからだ。

学校で教えるパーティとは、各人のスキルバランスやジョブ、クラスなどを考慮して構成するものだ。しかし信頼できるパートナーが何よりも心強いと実感した。

私とセロイナはパーティを組んで、依頼を探すことにした。

初依頼

当然だけど、依頼はできるだけ楽で報酬が高くなければならない。私たちのように、まだお尻に卵の殻が付いているような初心者はおさらだ。

でも、大半の依頼主は、安くて手数が揃いさえすればいいと思っているのが現状で、2万マルを持たない初心者目当ての依頼主が、集会所で口をあけて待っているのだから、フリーの依頼を受けるときは、そのことを心得ていなければいけない。

フリーの依頼とは、ギルドを介さず個人対個人で受ける依頼のことだ。依頼内容に制限がなく、お使いのようなものから、暗殺の依頼まであるらしい。

その点、ギルドが仲介する依頼は割にあっついていてまともだ。

ギルドにとってメンバーは大切な働き手であり、優秀な働き手に育てるといった観点をもっている。それに、不利な依頼が多いギルドに人は集まりにくい。

そのためギルドは、依頼主との交渉と、メンバーの力量に見合った依頼を仲介できるかに心血を注いでいるのだ。

ギルドの依頼は、依頼主が片隅の窓口（例の戦士兼受付係）に申し込むことで正式に受理される。私の考えでは、ギルドに受理されるだろうと依頼主が思うぐらいのまともな依頼がきつとそこにあるはずだ。つまり、ギルドより先回りして依頼を横取りしようという作戦。これを横取りガッツリ作戦という……。

入口前の石像にもたれながら考えていると、セロイナが嬉々とした表情でこちらに向かって走ってきた。

「マジブー！ いい依頼があったでえ！」

「え？」

「さっきの集会所で、私らのことを見てたおじいちゃんが声を掛けて来てなあ。色々と話したら、同情してもうて、いい依頼をやるって」

「え？ え？」

セロイナが強引に腕を取って、私の体をギルドの中へ引きずって行く。

「ちよつと待つて！ 依頼内容はちゃんと聞いたの？」 「ネズミの駆逐。簡単な依頼で、うちにぴったし」

「報酬は？」

「あ、報酬のことはまだ聞いとらんかったわあ」

「はあ……」

呆れて何も言えなくなった私を、まるで口を開けて待っている鯨のような建物の中へ、引つ張り込んで行った。

依頼人は農家を営む推定年齢70代のおじいちゃん。 若干後ろに後退した虎刈りの白髪に、ほぼ髪と同じ長さの白いあご髭。焼いた七面鳥のようにテカッテカな茶色い肌。 囚人かと思えるボロボロのねずみ色の作業服。

……うん。 お金持ちには絶対に見えないね。

「いやはや、こんな楽でおいしい依頼はこのギルドでも扱つたらんわい！ おぬしら、ラッキーじゃったのう。 ふごふごー！」

あごをしゃれこうべのように鳴らしながら笑うと、狡猾な肉食動物のようにキラリと目が光ったように思えた。

「ズバリ、聞いてもいいですか？」

「ふむ。ズバリ？」

「報酬は、おいくらですか？」

「……千マル」

「それじゃあ、私たち忙しいんで、この話は無かったということでは、回れ右をして、セロイナの腰布をつかみさつさと歩く。ネズミの駆逐といった依頼は確かに初心者向けだが、完全に駆逐したことが分かりにくいため手間損だ。仮にギルドを介すれば、少なくとも千マルよりは高い。

ここはやっぱり、横取りガッツリ作戦で……。

「頼みます！　どうか、依頼を受けてくだされ！」

おじいちゃんが私の進路を防ぐように走ってくると、その場で膝をついて頭を下げた。

集会所にいるギルドの人たちが、一斉におじいちゃんと私たちに注目する。

「このままでは農場の作物も採れなくなり、うちの娘フィオナも、何にも食べれんで飢餓してしまうんじゃないか。どうか、助けてくだされ……」

うわあ……最悪だ。まさか泣き落としするなんて。

どこからともなく「おい、引き受けてやれよ」とか「かわいそうに……」という声が聞こえてくる。

その無責任な野次は、ベテラン冒険者のからかいのようなもので、彼らは依頼を受けるといふ重みを良く知っている。依頼を投げ出せば信用を無くし、無理をすれば命を危険に晒す。そんな苦い経験を重ねた冒険者のなかには性根の悪い奴もいるのだろう。

私が葛藤していると、その横から何のためらいもなくセロイナが歩み出た。

「大丈夫や、おじいちゃん。うちに任せときいや」

おじいちゃんの肩に手を置き、うつすらと目に涙を浮かべながらセロイナは微笑んだ。

「ありがとぅ……ありがとぅ。……ところで、報酬は半分にしても
らえんかのぅ？」

「できないできない」

私は即答した。

ユーリエス地方には大昔の地盤沈下によって形成された大きな川
が流れている。この川のおかげで、都市周辺は肥沃な大地が広がり、
荒野でさえも膝丈の草が青々としている。

おじいちゃんの家はそんな恵まれた土地にあった。丘の中腹に街
を見下ろすように建っている少々こじんまりした白い家。所々にペ
ンキの剥げた跡や補修した箇所が生の木材が見えたりと、年季の入
りようを物語っている。色も形も全く違うけれども、ふと懐かしい
両親の家が脳裏に浮かんだ。

私の父と母は今も相変わらず、ひたすら働かされているのだろう。
土地を持っていない小作人の父と母は、陽が昇っている間は際限な
く安い賃金で働かされる。

そんな苦しい生活のなかで、私は学校に通わせてもらい、今は何
のノルマもない自由な旅をさせてもらっている。はつきり言って、
かなりの不良娘だ。でもこれは暫定であり、今のところ（仮）が付
いている。不良娘（仮）。でも必ず私は夢を叶えて、父と母を堂々
と迎えに行く。

「よし。がんばるよ！」

玄関前で教習生のときから愛用している櫓の杖を握りしめ、いざ
依頼人の家に足を踏み入れた。

ねずみといえども馬鹿にしてはいけない。あの前歯は岩も噛み砕
けるほど強靱で、鼻はじつによく効く。そのせいで執念深い厄介者
といわれ、農家では特に嫌われている。さらに病原菌を持ち込むこ
ともあり、まして咬まれてもすれば白魔術師の集中治療も必要にな

る。

おじいちゃんが私たちを部屋に案内するときも、杖を構えて、いざという時は火の玉を発射できるように慎重に移動した。逆に慎重になりすぎて、部屋に入ってインコが喚いたときは、危うく丸焼きにしてしまいそうになったけれど。

「アレが、そうじゃ……」

おじいちゃんは戦士張りのドスの効いた声で、庭を指差した。

「アレ？ アレってどういう意味や？」

セロイナは不思議そうに窓の近くに顔を寄せる。

私も庭をよく見ると、確かに作物が植えてあるの部分に、荒々しく黒い土が散らかっている。庭といってもかなりの広さがあり、あちらこちらと広範囲に点々と掘り返された跡が見受けられた。

「ひどい……」

実家の農場を思い出して、ひとり呟き同情する傍ら、セロイナは腑に落ちない様子で考え込んでいた。

「なんかおつかしいなあ……。おじいちゃん。本当に、これ、ねずみかなあ？」

「え？ ああ、もちろん。ねずみの仕業に違いないわい」

窓に鼻がくつつくほど、セロイナはもう一度庭をつぶさに見た。

「でもなあ、ねずみにしては穴が大きいし、掘り起こされた土がまだ濡れて黒いままや」

「さつき掘り起こされたってことが、そんなに変なことなの？」

「マジブー。ねずみは夜行性やん」

言われてみて、ハツとした。

セロイナの言うとおり、ねずみのほとんどが夜行性だ。ねずみは人が寝ているときに食料を盗むのだと、それで寝盗みが転じてねずみになったのだと、父がドヤ顔で言っていたのを思い出した。

そしてその後に、ジジイに対しての怒りが沸々と湧き上がる。

私は後ろを振り返り、百戦錬磨の騎士張りにドスを効かせて、ジ

ジイに杖を構えた。

「コラア！ ジジイ！ 本当のことを言えや！ 言わんと、七面鳥の丸焼きにするぞ！」

「お、お助けー！」

ジジイは本気になって、杖先を避けつつ、セロイナの後ろに隠れる。

チツ、なんて素早いジジイだ。あわよくば、一発ぐらい火の玉を発射したかったのだが。

「まあまあ、落ち着いて、落ち着きなさい。こらっ、こっち向けちゃあかん。杖をしまつて。はいはい、おじーちゃんも落ち着いて。」

……マジブー、杖は片手。両手で構えようとしちゃだめや」

攻撃態勢を解除した私になお注意を払いながら、セロイナはジジイの両肩に手をやって、優しく諭すように言う。

「おじーちゃん。私たちはなあ、おじーちゃんのことを助けてあげたいんや。だからな、敵のことを教えてーな。敵のことが分かれば、対策も打てるし、どう戦ったら有利かも分かる。こちらはこれでも色々勉強してるんよ。なあ、教えてえな」

ジジイは肩を戦慄かせながら、入れ歯をカタカタ鳴らし涙ぐむ。

……芝居の上手いジジイめ。

「わ、分かった。あ、相手は……パンサーじゃ。……おそらく、ブラックパンサー。魔物じゃ」

ジジイの答えにセロイナは顔をこわばらせた。

強く握っていたはずの櫂の杖が、カタンと間の抜けた音をたてて床に落ちた。

ブラックパンサー

死神の獵犬と通り名がつくほど、冒険者から恐れられている。

体は馬ほどの大きさで、漆黒の闇に紛れるのに適した光沢のない、真っ黒な色をしている。見た目は黒豹の強化版だが、大きく違っている点として、血のように赤い、深紅の牙をもっている。これには毒腺が仕込まれており、咬まれた動物は瞬時に麻痺してしまうのだ。ちなみにブラックパンサーの赤い牙は錬金術士にとって非常に価値の高いもので、最高級クラスの神経薬を生成する材料として高値で取引されている。

しかし黒豹と違う最大の相違点は、魔法を使うことである。

動物として攻撃面の素質を多く保有しながら、さらに下位の魔法を使えるほどの知恵があるのだ。たとえ力で勝てなくても、じわじわと魔法で体力を奪い、まるで狼のように執拗にまとわりつき、時にはそれが何昼夜に及ぶこともある。そして隙を見せたら最後、赤い牙の餌食となり冥府行きというわけだ。

ぞくつと首筋の毛が逆立った。うちのレベルじゃ勝てる相手じゃない。

一階の縁側に近い部屋で窓の外をじつと監視していると、外からセロイナが戻ってきた。

「フィオナさんは大丈夫だった？」

「ん？ ああ……元気やった」

セロイナはジジイを娘の元へ見送るため、わざわざ危険な庭を往復してきたところだ。ここ最近、ジジイと娘は安全な離れの家で暮らしているらしい。

「この依頼、私たち二人だけでは無理じゃないかなあ？」

私はセロイナの横顔を窺いながら、何気に依頼を断ることを勧めた。学校にいたころは、幾度となくセロイナの無茶無謀な作戦に巻き込まれ、明らかに失敗と思われる作戦の撤収を求めても、一度とさえ受け入れられることはなかった。

ここは慎重に事を進めなければならない。

セロイナという頑強な要塞をおとすには、十分すぎるほどの論理武装と、決して諦めない屈強の精神が必要だ。

ゴクリと生唾を飲み込む私の横で、セロイナは腰布を結びなおしながら、ぼそつとつぶやく。

「せやなあ。まさか相手が魔物なんて、思ってもみなかったわあ。

この依頼、やっぱやめとこうかなあ……」

「え!？」

「そら確かに、依頼をほっぽり出すのは嫌やけど、おじいちゃん達には別の家もあるんやし、無理に魔物を倒すこともないんやない？」

「!？ セロイナはこの依頼ノリノリだったじゃない？ どうしてそんな急に……」

セロイナの横顔をまじまじと見て、あの超好戦的なセロイナであることを再確認する。

「ブラックパンサーっちゅうのも、かなり無理な魔物やし、これで怪我でもしたら、こちらは白魔法使えんやろ？ 報酬は無くなるわ、治療費はかかるわで、なんもいいことないとちゃうかな」

正論。

あまりに真つ当なことを言うセロイナをしばらく呆然と見る。

私の知っているセロイナなら、「何いってるんや、マジブー！

ゾクゾクしてきたな！ へへへ」と、顔を紅潮させるはずだ。最後の「へへへ」は余計だけど。

「もしかして……騎士団の試験に落ちて、自制心を学んだとか？」

「何いってるんや。騎士団の試験では、うちが一番や。あいつらは、うちが女という理由だけで失格にしたんや!」

「となると……はっ！ も、もしかして、学校での模擬訓練は限界を知るために、あえて無茶をして戦っていた！？ 実戦では、徹底して慎重になるべきだと、私を諭してくれているのね！」

小さく溜息をついて、セロイナは椅子に腰掛けた。

「……お腹すいたなあ」

で、でたあー。ついにでおったわ！ その自制心のなさ、意味の分からない目的のために全身全霊を捧げる、その本性が！

「なあ、マジブー。例の鶏の油揚げを作ってくれんかなあ？ うち、もうぺこぺこや」

偶然にも部屋の隅にあるキッチンに、オリーブオイルと鶏肉がある。

さてはジジイを部屋から連れ出したのも、セロイナの一計ではなからうか。となると、この依頼を受けたのも、私を仲間にしたのも、セロイナの陰謀のようではない。

「はあ……。しょうがないな」

こうなると説得のしようはないので、私は手早く鶏の油揚げを作ることにした。ジジイには後で食材の代金を払おう。

キッチンに立つと、セロイナは体をくねらせながら、その溢れんばかりの喜びを表現しに来る。正直言つて邪魔なだけなのだ。

「マジブーの料理は、ほんとうにおいしいからー」

学校や宿屋が出す食事は、ほとんどが無味無臭の食べ物だ。今まで自分の料理以外で美味しいと思ったのは、母の料理ぐらいしかない。

さて、オリーブオイルは少ないし、あまり大量に使うのも勿体ない。ここは油揚げではなく、鶏肉を香ばしく炒めたほうがいいだろ

う。

調味料は塩と胡椒でいい。あつ、バジルとレモンもある。

下ごしらえした鶏肉は皮から焼いてパリパリにして、油は一切使わない。裏返して中まで火が通ったら、少しだけオリーブオイルをたらして鶏肉から出てきた油と塩を混ぜてソースにする。最後は焼きあがった鶏肉にソース、レモン、胡椒、バジルをかけて完成。

香ばしさの中に上品なバジルとレモンの香りが漂う。鶏肉のソテーを山のように皿に盛りテーブルの上に置くと、セロイナは二三個口に頬張った。

「う……うまいっ！ 美味すぎる！」

感極まって、肩を震わせ涙目になる始末だ。いったい、どれだけ不味いものを食べてきたやら。

「それで、ブラックパンサーはどうするの？」

ひとまず落ち着いたセロイナにもう一度聞く。

「ん？ んーと、どっちでもええよ」

「はあ……。じゃ、断りますか」

でも、依頼をなしにするなんて、正直なところ、冒険者としては恥ずかしくて悔しい限りだ。

私は長い溜息をついたあと、縁側に向かった。

「ジジイのところに行つて、依頼を取り下げてもらうわ」

セロイナは頷かなかった。たぶん私と一緒に、悔しさと漠然とした不安が重くのし掛かっているのだろう。もしくは、ただ単に、鶏に夢中になっているかだ。まあ……おそらく後者なんだろうけど。扉を開けるとあぜ道を遮るように、ちょこんと上品な飼猫が座っていた。油のいい匂いに誘われてやってきたんだろう。

いや……。この距離にして猫というのは大きすぎる。

それに体の色はまるで漆黒の闇のように、黒猫とは異なる禍々しさがある。その違和感に気づいたとき、私の体は硬直した。そして真つ白な頭の中に、『ブラックパンサー』という文字が突然ひらめ

いた。「きゃあああああ！」

ブラックパンサーは私の悲鳴に驚いたらしく、踏んづけられたような声を発して、庭の茂みに逃げ込む。

「どうしたんや、マジブー！」

「ブブブブブブー」

「でたんか！？ 奴が！」

私が指差す茂みに向かって、走って行こうとしたセロイナを慌てて出口で引き止めると、抜けそうな腰を杖で支えながら、懸命に魔力をコントロールした。「待ってセロイナ！ とりあえず、セーブしとくっ！」

セロイナの体を包み込むように、透明な薄い膜が広がった。

セロイナを中心とした完全な球体ができあがると、ぐいつと手前にセロイナの分身を引き出す。だんだんとその水玉は小さくなり、手のひらほどの水晶玉になった。

水晶玉のなかには、完全な球体を形作った瞬間の、全てを記録したもう一人のセロイナが、氷の彫像のように静止している。そして水晶玉を屋根の高さまで浮かべて、誰にも触れさせないようにしておく。

セロイナは小さくなったもう一人の自分を見届けて、庭に飛び出した。あとはセロイナがピンチになったときを見計らって、水晶玉から復活させてあげればいい。セーブポイントさえ作ってあげれば、保存した状態にいつでも還ることができる。

ただし、意志をもつ魂が消滅してしまっただけでは遅い。この世に、人を生き返らせる魔法はないのだ。

私は疾風のごとく走り去ったセロイナを、杖をつきながら徘徊老人のように追いかけた。

ブラックパンサー

セロイナとブラックパンサーは茂みに囲まれた庭の中央で対峙していた。

障害物となる木や柵もなく、鳥の声や草のざわめく音も消えて、そのフィールドには、日常的にある何かが消えてしまったような不自然さがあった。

地面に爪を穿つように、ブラックパンサーはゆっくりとセロイナの側面に回り込む。

慎重だな、と私は思った。双方を天秤にかければ、ブラックパンサーのほうが体力も攻撃力も二倍以上だ。それなのに、正面から襲ってこないなんて。魔物とはこれほど聡い生き物なのだろうか？

手のひらほどの石を拾って、セロイナはブラックパンサーへ思いっきり投げた。

「はよ、かかってきいや」

これが見事にブラックパンサーの頭にヒットすると、手のひらほどの大きな赤い牙を二本見せつけながら咆哮した。そしてまたゆっくりと回り込む。

なお冷静さを失わないブラックパンサーに驚いた瞬間、体が二倍ほど伸びて、空をとぶ鳥の影のようにセロイナへ飛び掛る。あやうくセーブ元へ還してしまいそうなほど、ブラックパンサーの攻撃は意表をついていた。

しかし、セロイナは宙に浮いたブラックパンサーにチャクラを込めた回し蹴りを放つ。

横顔に重い一撃をもらって、ブラックパンサーは茂みを下敷きにして転がった。私は何倍もの体重差を無視して痛快に放つ蹴りの凄さに思わず感嘆した。

セロイナの格闘センスにはいつも驚かされる。とくにチャクラの使い方、というより、使いどころについては格闘課で右に出るものはいなかった。

チャクラは爆発的に運動能力を高めるけれど、魔力のように簡単に回復できない。無駄に使えば、あつという間に効果がなくなるのだ。

体勢を戻そうとするブラックパンサーは無防備で、セロイナにとつては仕掛けるチャンスだ。だが、ブラックパンサーを守るように、周囲には氷の刃が浮遊して、セロイナの追い討ちを許さなかった。

「これはやばいかも……」

思わずそうつぶやいてしまうほど、セロイナにとって不利な戦いになっていた。セロイナには飛び道具がないのだ。けん制ができない分、一撃必殺の戦い方だから、長引けば勝率は低くなってしまう。ブラックパンサーはセロイナとの距離を取り始めた。消耗戦に持ち込むつもりなのだろう。杭のような硬い氷を飛ばして、間合いの外から攻撃する。このままではセロイナは赤い牙の餌食となるだろう。

もしこれが、一対一の戦いなら。

私はブラックパンサーめがけて、火の玉を放った。追尾はしないけど、当たったら結構なダメージになる大きさの火の玉だ。自慢じゃないけど、セーブ術の複雑さに比べれば容易い魔法だ。私が知ってる『唯一』の攻撃魔法。

突然の横槍にブラックパンサーは注意をそがれて、セロイナはその隙に接近する。一方の私は、櫂の杖を鍬のように何度も振って、噴火した火山のように休みなく発射する。

二対一という、数で勝つ少しばかり卑怯な戦法に、ブラックパンサーは氷の刃で火の玉を相手しながら、セロイナと戦うという戦術で対応してきた。敵ながら、あっぱれ。

集中力を欠けば火の玉か、セロイナの鉄拳をくらってしまう。苦

境に陥ったブラックパンサーは、短期決着とばかりにセロイナに突進した。

氷と炎の断片が雨のように降るなか、セロイナの判断が少しばかり鈍っていたのかもしれない。

動きに合わせるようにセロイナはチャクラを込めた回し蹴りを放ったのだが、ブラックパンサーは僅かに勢いを留めて、フェイントを入れた。

赤い牙とセロイナの大腿部がすれ違った

セーブ士にとって、最も大切なスキルは「観察眼」である。戦況をきちんと把握して、思考の隙をついた攻撃でも対応できなければいけない。たとえ槍の雨が降っていようと、目のくらむ雷が絶え間なくとも、仲間を助けるタイミングを逸してはいけない。

はた目はピンチに見えても、じつは敵を欺く演技なのかもしれない。

私は即座に、セロイナをセーブポイントに還した。赤い牙は光の粒になったセロイナを噛み砕いたが、ガチリと歯が鳴っただけだった。水しぶきのような青い光たちは、風に吹かれるように白い家へ飛んでいく。

攻撃に失敗したブラックパンサーと目が合ったとき、想定外の事実が気がついた。セロイナがいなければ、だれがブラックパンサーと戦うんだっ！

ブラックパンサーが地面を蹴って駆け寄ってきた瞬間、体が硬直した。あの黄色い瞳から確かに感じ取った殺意は、私を圧倒した。まばたきさえできず、ただひたすら、どうやったら生き残れるかを考える。火の玉を発射したところで、敵には同じ威力をもつ氷の刃がある。それに直進するだけの魔法など、簡単に避けてしまうだろう。

ブラックパンサーは私の力量を知っている。接近戦に弱く、攻撃

魔法も少なく、サポート要員であることも気づいているはずだ。

こうなってしまったら、残された選択肢は……『逃げる』しかないっ！

私は全速力で白い家を目指した。

振り返ると、飛ぶような勢いでブラックパンサーが走ってくる。

その距離の縮まり方を考えると、あきらかに家へたどり着く前に捕まってしまう。しかも、ブラックパンサーの呼吸は穏やかで、冷静沈着なハンターのを失っていないかった。

顔を正面に戻して、もつと足に力を入れて必死に走った。そして敵が私の背中に爪を立てるであろう、その到達のタイミングを考える。

その予測したタイミングで振り向き、火の玉を放った。まさに思い描いていたとおりに、上体を起こしたブラックパンサーの首が炎に包まれた。構えもせず放ったせいで、私は反動で吹っ飛ぶ。そしてすぐに体勢を整えるため、立ち上がった瞬間 陽が翳った。

まるで空から降ってきたかのように、闇が広がり、そのなかに深紅の牙がはつきりと姿を現す。

ブラックパンサーは私の魔法を受けてもなお、決定的な攻撃のチャンスを見逃さなかった。格下の私が勝てるような相手ではなかったということだ。

諦めかけたとき、もう一つの影が空中で交錯した。

石が激しくぶつかり合ったような音がすると、ぱつと視界が晴れる。気づくと横にセロイナが立っていて、少し離れたところでブラックパンサーが転がっていた。

「ごめん。マジブーをエサにしようた」

セロイナは悪戯な笑みを見せて、私を立ち上がらせた。まあ幽でも使わなければ、勝てない相手なのかもしれないけれど。それでもひどい。

セロイナは握っていた石を捨てて、草の上に落ちているブラックパンサーの赤い牙を拾った。あの大きな石で空中にいるブラックパンサーの牙を叩き割ったのだらう。これは痛い。

視界の端にある黒い塊がむくりと動いて、私は慌てて身構えた。

しかし、ブラックパンサーの折れた右牙からは血が滴り落ち、平衡感覚が麻痺しているせいか倒れそうになる。そして何度かセロイナを見ながら、ゆっくりと雑木林の方へ消えていった。

「また……来るかな？」

「いや。もう来ないやろ」

「どうして？」

「いったん縄張りから身を引いてしまったんやから、また来るなんて恥ずかしいやろ？」

「ふん。そうなのかなあ？」

「奴にもプライドっちゅうもんが、必ずある」

セロイナの横顔はなかなか決まっていた。……私を囚にしたこと、もう忘れてないよね。

「セロイナって、本当に無茶をするよね」

私とセロイナはジジイのいる離れに向かっていた。すでに陽は山肌を赤く照らし、虫の音も山鳥の声も来たときより随分と変わっている。

「そうかなあ？　うちの思ってる無茶と、マジブーの思ってる無茶がちやうだけやないかな」

「ブラックパンサーと戦うことは無茶じゃない？」

「ああ、それは……無茶やな」

はははっ、と軽快に笑うセロイナを見て、さっきの大闘乱と一緒に笑いがこみ上げてくる。出来立てはやほやの冒険者二人組みが、死神の獵犬といわれるブラックパンサーと戦うなんて。セーブ士ア

ルゼナの伝説でさえ、最初の敵はゴブリンと決まっている。

セロイナの性格は学生のように十分に分かっているつもりだったけど、どうやら改めないといけないみたいだ。無謀だと思っていたことも、説明のつかないセロイナの直感で、結果的にすべて大成功を収めていたのかもしれない。

ジジイの離れ小屋は白い家に比べて大分小さく、まるで牛舎のようだった。

扉を開けると、いきなり牛が不機嫌そうにモーツと鳴いた。どうやら玄関の土間で牛を飼い、奥を改築して生活できる部屋を設けているようだ。牛の鼻息を浴びながら奥に進むと、いかにも素人が取って付けたような扉があった。

扉を開けると、もっと生活感のある部屋になるのかと思いきや、あまり変わらず、ジジイがせっせと乾燥したトウモロコシを斧で割っていた。その隣には干し草に布を敷いただけの簡易ベッドがある。「おじいちゃん。ブラックパンサーをとっちめてやったでえ。もう二度と来ることはあらへん」

「なに……ほんとうか!？」

ジジイは手を休めてセロイナを見上げると目を丸くした。

「ほれ」

セロイナは腰布の間に挟んでいた赤い牙をジジイの前にちらつかせる。

「ほんとうに、二度とわしの庭に奴が現われることはないんじゃないかな?」

「うーん、とセロイナは腕を組んで、座っているジジイを見下ろす。

「あの庭は、おじいちゃんの庭じゃあらへんやろ?」

「どうということじゃ」

「柵もないし、大きな雑草が茂みをつくって、どう見ても昔からある庭には見えへん。最近、庭を大きく広げたんやろ?」

「……だからどうだと?」

「あの庭はずっと昔から、ブラックパンサーのものやっちゅうことや」

「……地主から土地の権利を買っておるし、違法なことは何もしておらんではないか。わしはな、奴に金を払ったのではない。土地に金を払ったんじゃ」

ジジイは立ち上がって、セロイナに詰め寄った。セロイナはジジイから目を離して、哀しそうに地面を見据えたままだった。

「分かったよ、おじいちゃん。ブラックパンサーは二度とおじいちゃんの庭にくることはない。もし庭に現われたら、報酬はぜーんぶ返す」

「ええっ!？」

と、喚いた私に、セロイナはなんとも穏やかな目をして微笑みかけた。

「そこまで言うんじやったら、このとおり報酬を払おう。じゃが、もし、また奴が現われたときには、お前達はペテン師じゃったと街中に言いふらすからな!」

「かまわんよ。マジセブ、行こうか」

セロイナはさっさと離れを出て行き、私は依頼主に一礼して、その場を去った。まあ、とりあえずはきちんと約束どおりの報酬をいただいたわけだ。

丘を下る途中、セロイナは夕陽にあの赤い牙を掲げた。世界の終わりかと思えるほどの赤い夕陽を浴びて、牙はよりいっそう燃えるように輝いている。

「庭を拓げたのは、娘のためだったのかな？」

妙に無口なセロイナに、なんとなく問いかけると、半分口を開けてセロイナが笑った。

「娘さんは美人やったなあ？ マジブー？」

「はあ？ どういうこと？」

「だから。扉を開けたところに、いたやろ？ フィオナさんが。モ
ーオって」

「……ええっ！？ フィオナって、牛のこと！？」

立ち止まる私に、満面の笑みを浮かべるセロイナ。

「あのかそジジイ……！」

杖を構えながら丘を登ろうとする私を引き止めて、セロイナは赤
い牙を親指で空に放った。

「千マルの十倍はいくやろ？」

リンク5

次の朝、セロイナと一緒にユーリエスの錬金店を訪れた。

叔母が言うには、そこはユーリエスで一番の老舗らしく、常連の客でなくても丁寧に対応してくれるらしい。

ちなみに叔母は夜のうちにユーリエスを発つて、二昼夜経てば戻ってくるそうだ。できれば、その間までに自立しておきたいけれど、なんとも、まあ、今のところギルドに入会することさえできていない状況である。

錬金店の中は、黄色い煙が漂っていて、きな臭さが奥へ進むにつれ強くなっていく。天井には、何かが黒く干からびたものや、謎の紐、カゴに入った鳥、コウモリなど、色々なものがぶら下がっていた。

店の奥にはおばあちゃんが一人座っていて、乳鉢に木の実のようなものを入れながら丹念にすりつぶしている。その横では煮立った釜がぐらぐらとフタを揺らしており、いかにも錬金術士といった雰囲気をもし出していた。

おばあちゃんにブラックパンサーの赤い牙を、どれぐらいの値で買い取ってもらえるのか尋ねてみる。

「質によるね。大きけりゃいいってもんじゃない。そうだね……りんごのような鮮やかなものなら、2万」

「！……にまん！？」

私の大声で、店にいる鳥や猿や猫やらが一斉に騒いだ。

「なら、これは？ 生きてるブラックパンサーからへし折ったんやで」

セロイナも興奮気味に、腰布に挟んである赤い牙を乳鉢の横に置

いた。乳棒をかき回す手を休めて、おばあちゃんはそれを光に当てたり、舐めてみたり、嗅いでみたりする。

十通りぐらいの方法を試して、やっと満足したのか、机の上に置いてうんうんと頷いた。

「菌茎から折れていて、毒腺がすっかりあるね。色も申し分ない。ブラックパンサーは最近じゃ珍しいんだよ」

「で？ で？ いくら？」

「……1万5千マル。これ以上は出さないからね。もったいぶつてもだめだよ」

私はセロイナと顔を見合わせて笑うと、互いに抱きついた。

「やったー！」

「ほんとう、すごいわぁ！」

「騒ぐのは店の外でやってくれ！ 獣どもが騒いでしょうがない！」

おばあちゃんは1万5千マルを手早く渡して、さつさと店の外まで私たちを追い払った。

店の外に出てもしゃぎ続ける私たちを、おばあちゃんは厳しい目つきで見下ろす。

「あんたたちにひとつ忠告しておく。ブラックパンサーは一度戦った相手を忘れない、とても賢い魔物だからね。街のなかは安全かもしれないけれど、道中は背後に気をつけるんだよ。奴が死神の獵犬と言われるのは、冥府までも追いかけてくる異常なまでの執拗さにあるんだからね」

踊っていたセロイナと私の足が止まった。半分口を開けて、おばあちゃんのほうを振り向くと、すでに店の奥に消えていた。

「なんかなあ、複雑やなあ……」

「依頼があとを引いているのは、よくないよね」

「やつぱり、あいつにはトドメを刺しておいたほうが良かったんかなあ。でも、もともとあいつの土地なんやから、可哀相すぎるやろ」

セロイナにしてはめずらしく、へこんでいるのかと思いきや、
「しかし、やってしまったことは、もうしかたのないこつちゃ！」

また奴が現われたら、もう一本も貰ったろ！」

……立ち直りが早い。

ギルドは相変わらず、大勢の人が出入りしていた。今度はセロイナに任せず、私が率先して依頼を探そうとした矢先、フードを被った男が行き先をふさいだ。

「あんたたち、依頼を受けにきたんじやろう？ わしもパーチーに入れてくれんか？」

その怪しげな言葉遣いに、どこかイラツとさせられるものを感じる。

セロイナはおもむろにフードを脱がせると、そこには前依頼主のジジイがいた。

「強引すぎるじやろ！ わしはもっと、ミステリアスな感じでいきたかったのじやが……」

と、語るジジイをまるで空気のように無視して歩を進めたが、ゴキブリのような速度で回り込んでくる。

「ま、まってくれ。わしはな、おまえさん達の活躍ぶりをみて、何十年前のように冒険がしたくなっただんじや。死んでしまったばあさんは、とてもとても冒険が好きでう。寝たきりになっても、冒険をしたいと、いつも言っておっただんじや。わしはな、ばあさんの分まで冒険をしたい、いやするべきだと、おまえさんたちを見てそう思っただんじや」

「そう。じゃあ、また今度やな」

と、言ったのはセロイナである。太っ腹のセロイナからも見捨てられるとは、あんた相当やばいよ、と無慈悲な哀れみの目で見下してやった。

私たちはギルドの依頼受付に行き、1万5千マルぐらいでどうにかならないかと相談してみた。まあ、ものは試しである。

受付の回答はこうだ。

「当ギルドには約三千名様の会員がいらつしゃいますが、二万マル以外でギルドブックを販売したことは一度もありません。2万マルはユーリエスならず各地のギルドと合意した金額であり、いわばギルドの法律に則った金額であります。これにはギルドマスターブックへの転記代および人件費、発行するための紙の代金、ギルドへの寄付金が含まれており、今後のギルドを安定して運用していくための……（略）」

今、所持金は1万8千マル。つまり最低でも一回は依頼を受けないと、一つ目のギルドブックは手に入らないというわけだ。しかも、ギルドが関わらないフリーの依頼をやらなければならない。あと2千マルほどあれば、ギルドの依頼を受けることができるのだけれど、回れ右をしてその場を去ろうとすると、ジジイが半分笑みを浮かべて待っていた。

「こう見えても、わしはギルドブック持ってるぞ？ どうじゃ？ 考え直さんか？」

ジジイはギルドブックを取り出してちらつかせた。

ギルドの依頼はメンバー向けにランク付けがされている。ランクはギルドの厳正な審査を経て決められ、メンバーはランクの一定数を越えれば、次のランクの依頼を受けることが出来る。当然ながら、上位のランクであれば報酬も大きい。

最初はランク1の依頼から始まる。ここでは害虫退治などがあり、何かの手伝いみたいな依頼が多い。

ランク2に上がれば、薬草の採取や鉱石集めだったりなど、若干手間のかかる作業が多くなる。そしてランク3になれば、一気に危険性が増して魔物の撃退や狩猟といった依頼になるのだ。

「それで、おぬしらはどれぐらいのランクを受けたいんじゃ？」

「ランクねえ……とりあえず、お金が欲しいんだけど」

「なんじゃ、金の亡者か……」

「うるさいっ！ まあ、2万5千マルあれば、私とセロイナのギルドブックが買えるわ」

「ふむ。2万5千か」

ジジイは何度か白い無精髭をなでて、ギルドの依頼受付に行き、しばらくして戻ってきた。

「お前さんたち、ちょっとついてきなさい」

ジジイの後について、受付の後ろにある扉を開けると、妙に明るい部屋に入った。

あちらこちらにランプが置いてあり、部屋の真ん中には黒檀の机と椅子が鈍い光を反射している。一見、絨毯や壁の素材は豪華だが、何か生活感に欠けている変わった部屋だ。

「ここは何なの？」

「ランク3以上を受ける場合に使う部屋じゃ」

「ええっ！」

私の驚愕の声にランプの炎が少しゆれたように思えた。

「ということは、今から受ける依頼はランク3ちゆうことかな？」

「うーむ。おそらくランク5、じゃ」

「「ええっ！」」

と、驚いたのはセロイナも一緒だ。三人とも椅子に座ってそんなことを話していると、奥の扉から一人の男が出てきた。

「おまたせしました」

シルクのシャツに鹿のブーツ。若干天然で長めの金髪に左手にはダイヤ、右手にルビーの指輪。なかなかいい男だが、見た目からして胡散臭い。

その落ち着いた風貌から見た目以上に年増なことから、言葉に正確さを求めていることは最初の一言で分かった。おそらく、ギルドのなかで上層にいる人間だろう。

「私の名前はシグナと呼んでください。パーティーの代表は、カジ・

アルゼナでよろしかったですか？」

「ふむ」

カジ・アルゼナ？ どこかで聞いた名前だ。カジ？ 舵？ 鍛冶？
カジは知らない。アルゼナ？

「ええっ!？」

突然の私の大声に、他の三人は固まった。

「……コホン。それで、アルゼナ様はランク5の依頼で、条件は報酬が2万5千マル程度ということですよかったですか？」

「そんな依頼があるのかの？」

「そうですね、ランク5からは10万マル以上がほとんどです」

「じゅ、じゅまん……」

セロイナは不意に口から溢れる何かを拭った。

シグナは人差し指の長さほど分厚い本を空中から取り出すと、本が勝手にページをめくり始める。やがて、ピタリと止まると、シグナは空中に浮かんでいる本を引き寄せた。

「これはどうでしょう？」

開かれたページにはびっしりと依頼内容が書かれている。ジジイはそれにじっくりと目を通して、シグナに頷いた。

「じつにいい。この依頼を引き受けたいのじゃが」

「かしこまりました。それでは旅の諸経費に5千マルをお支払いしますので、少々お待ちください」

まるで紳士のようにシグナが部屋を去ったあと、私とセロイナはジジイにかみつくかのように迫った。

「アルゼナってどういうこと!？」

「諸経費に5千ってなんやねん!？」

ジジイは私とセロイナを見て、にやりと笑った。

ネレ高原

私たちは依頼達成のため、目的地のネレ高原に向かっていた。

ネレ高原は険しい山道の到着点にあるが、朝出発すれば夕方には辿り着く。しかし雨が降り、道がぬかるんでいるせいで捗らなかった。

街で旅の支度をしているとき、カジは私の質問には答えなかったが、セロイナの諸経費5千マルに関する質問にはよるこんで答えた。「ギルドにもよるが、諸経費は上位のランクを受けるギルドメンバーに無償で充てられる。無論、依頼達成率が高く、ギルドから信頼されていないとだめじゃが。あのシグナとかいう若僧は、わしを信頼するに足ると判断したんじやろう、なかなか目の利く奴じゃ、ふごふご」

「5千マルを他人にあげるなんて、考えられへんわ。ベテランになれば、収入もいいし諸経費なんかいらんとちゃうかな」

「ふむ。やはりお主は、なかなか頭の回転がいいの。たしかに、ベテランは5千マルなんぞあまり当てにはしておらん。しかし、あれはあつたでうれしい。諸経費はさっき言った通り、ギルドによってマチマチなんじゃ。つまり、ギルドは他のギルドより諸経費を上乗せすることで、ベテランが他のギルドに流れてしまうことを食い止めておるんじや」

「ベテランちゆうのは、そんな少ないんか」

「少ない。ベテランという言葉の定義にもよるが、おそらくランク4から以上を無難に達成できるメンバーをベテランと言っていいじやろう。そこまでいけば、勇者のお供ぐらいはできるかのう。ふごふご」

レベルが高すぎでしょ！　と言おうとした矢先に、セロイナが嬉々とした表情で、握りこぶしを突き上げた。

「そりゃ楽しみやわ！　いっちょ、やったるで！」

セロイナの横で私は大きな溜息をついた。

カジの実力がどれほどかわからないが、ジジイであることに変わりはない。昔は強かったのだろうが、今その面影是一片もない。

……ゼロだ。

ただ、ランク5に挑戦できることは大きな経験になるし、これまで知らなかったことをカジは教えてくれる。それだけでも、十分にやる価値はあった。

それに達成できなくとも私とセロイナはギルドブックもないことだし、未達成の烙印もないわけだ。あまりに無理そうならば逃げてしまえばいい。そう思うと、ずいぶん気が楽になった。

私は杖について時折腰を伸ばすカジの後ろ背に、改めて質問してみる。

「アルゼナって、あの伝説のセーブ士、シス・アルゼナじゃないよね？」

「……」

私が講師から聞くアルゼナ様は、美しい女性の姿だった。学生にとってあこがれの的である勇者の話の影には、必ずと言っていいほど、美しいセーブ士の活躍が薄らと語られた。だからおじいちゃんがアルゼナ様であるはずがないのだ。

カジからは、「違う」という一言がほしただけで、私はそれで納得する。妙に無口になったりするカジを見ると、まさかと思って心がざわついた。何度か同じような質問してみたが、結局カジは何も答えてはくれなかった。

雨粒の重みで大葉の草が寝てしまい、獣道はいっそうわかりづらくなっていた。

斜面を登りきると、いったん中腹の平地にでた。大きな木が上空

で葉を広げて、あたりは余計に暗い。不意にバサバサバサと、しずくが落ちて低木の葉を鳴らす。すると、先頭にいるカジはピタリと足を止めた。腰を伸ばすわけでもなく、まるで耳を澄ませるように固まった。サツと獣道を何かが横切る。ずいぶんと暗い場所にいるのだと、そのとき初めて気付いた。

ふと私は錬金店にいたおばあちゃんの話を思い出した。死神の猟犬の話を。

黒い影は私たちの行く道を何度か横切ると、気配を消してしまっただ。

「ありや？ 襲ってくると思うたのに、どうしたかの」

振り返ったカジは一度目を丸くしたあと、腹をかかえて笑う。私はカジの視線の先を追うと、危うく腰を抜かしそうになった。

セロイナのすぐ横にブラックパンサーがいるのだ。それだけではなく、セロイナはブラックパンサーの両頬を伸ばしたり縮めたりしている。

「なんやー。お前も一緒に行きたいんか」

ブラックパンサーは「ナハーツ」と邪悪に受け答えた。

雨が去り、代わりに夕闇があたりを包み始めた。再び斜面にさしかかると、私は二人にセーブ術を施すため、しばらく動かないでほしいと伝えた。街を出る前に唱えていたセーブ術は、すでに効果を失っていたのだ。ここでセーブするとユーリエスにあるセーブポイントが消えてしまうが、セーブしないよりはましだ。

セーブしている間、ブラックパンサーが横から近づいてきて、不思議そうにセーブ術の術式でできた水晶をのぞきこんでいる。

私は距離をおいた。

しかしブラックパンサーは無遠慮に近づいてくるではないか。私はさらに距離を置いて、セロイナを挟むように位置した。するとセロイナの脇下から、ぬっと顔を突き出して私の警戒空域に侵入。驚きのあまり魔力をコントロールし損ねて、完成間際の水晶がボロボロと空中分解していく。

「ちよつと！」

私の悲鳴にも似た声に、ブラックパンサーは首を傾げる。

「クロ、邪魔しちゃあかんやろ。そっちに、お座り」

セロイナが突然使い始めた『クロ』という単語に反応して、ブラックパンサーは指示された場所に腰を下ろした。

このブラックパンサーは、自分自身をクロだと理解しているのだろうか。

「あとで、マジブーがやってくれるからな」

セロイナはブラックパンサーの頭をなでながら、なだめるように言った。

「ちよつと、このブラックパンサーもセーブするの!？」

「そうや。いちおう、仲間やし」

私はセロイナの手を取り上げると、ブラックパンサーから離れた。学校で習ったでしょ。魔物は危険な生き物だって。魔力に憑かれた野蛮な生き物なのよ。魔法課の教科書には、常に距離をとらねば噛み殺されるともあるし、格闘課の教科書には、見失うと魔法の餌食になるとも書いてあるのよ。魔王が従える危険な生き物なのよ」

一方的に捲し立てて、息継ぎをする。

「でも、いまのところ平気やん。まあ、心配せんでもいいから。…

…いざという時には、この拳が炸裂するからな」

「私を困にしないと倒せなかった相手なのにな」

ハハハッと軽快にセロイナは笑った。そして「大丈夫」と肩を叩いて、クロのもとに戻る。

なんという根拠の無い自信だろう。でも、セロイナが有する第六感的なものに、学校生活では何度も助けられている。それに……セ

ロイナの意思を変えることは、とても難しい。忍耐と度胸が必要で、説得するまで長い苦難の道を歩まなければならないのだ。

渋々セーブ術の有効範囲ぎりぎりのところに立ち、ブラックパンサーを正面から見据える。セーブ術が魔物に効くか分からなかったが、とりあえずやってみると無事にクワのセーブポイントができあがった。水晶の中にはまるで借りてきた猫のように、おとなしく座るブラックパンサーが映っている。これまでにセーブ術を魔物に使った事例などあるのだろうか。少なくとも私は一度も聞いたことがない。

斜面を登りきると、生い茂っていた木々がなくなり、切り開かれた場所に出た。

少し先には丸太を横積みした高い壁があり、これがネレ高原の西と東の谷まで続いている。本来ならば、かがり火が夜でもはつきりと見えるのだが、雨のせいで焚かれていなかった。

陣営内には簡素な造りのがあった。私たちと同じ冒険者がそこに十人ほどいて、入ってきた私たちを足先から頭まで、じつとりと観察する。ボデイラインに全くの自信がない私にとってみれば、杖でフルスイングして横っ面を叩き回りたいぐらいだが、おそらく彼らはベテラン冒険者で、初対面した私たちの力量を推し測っているのだろう。

奥には、厚い布地の服を着た男が、ランプに火を入れていた。

「だいぶん遅くなりましたね。カジ・アルゼナさん」

男はカジと握手をして、にっと笑った。戦士みたいな服装のわりには、なかなかシャープな顔と体だ。ヒゲはなく、全体的に優男っぽくみえる。しかし年齢は四十ぐらいで、それなりに人生の障壁を二度、三度は味わった渋さをかもし出していた。

カジは簡単に挨拶すると、私とセロイナを紹介した。ちなみにクワは、私たちが斜面を登り終えた頃、いつの間にか姿を消していた。

「僕は依頼主であるセントロイス騎士団の、アルスタットと申します」

彼の胸には下位の騎士を示す紋様が刺繍されていた。下位の騎士といえば、まだ入りたての、私ぐらいの年齢の若者が属する底辺の階級だ。

彼の他に騎士団がないことを考えると、どうやらアルスタットは戦うためにきたのではなく、依頼が遂行されていることを確認する立会人なのだろう。

アルスタットはカジと話をしたあと、私とセロイナについて来いと合図した。

しつとりした月明かりの夜道を黙々と進むと、木壁の一番端にまでたどり着いた。

「夜警が君たちの主な任務だ。かがりの火を絶やさぬよう、雨が止んだら、全てのかかりに火を灯すこと」

雨露を逃れるように、やぶの中に薪の入った布袋が置いてある。この布袋を抱えて、壁沿いのかかりに火を灯して行けばいいのだろう。

「あの、昼間は何をすればいいんでしょうか？」

「君たちは幕舎のなかで、みなのおべ物の調達をしてもらえないか」

「え？ …… そんなのでいいんですか？」

「この壁の向こうは、まだギルドの一員でもない君たちには危険すぎる」

昼間になるとネレ高原には魔物が現れ、壁を越えてユーリエスに侵入しようとする。魔物はセントロイスとユーリエスの国境沿いにある樹海から発生しているという。

セントロイスはユーリエスから雇われる形で、騎士団の一部を魔物との防衛線に割いていた。ここ最近になって、セントロイスは発生源を特定する方針に切り替え、防衛線には騎士の代わりに多数の

ギルドメンバーを充て始めていた。

私たちが請け負った依頼は、防衛線での単純な魔物狩りだ。倒した魔物に応じてポイントが算出され、200ポイントで満了となる。誰がどれぐらい魔物を倒したかはアルスタットが検分するのだろう。じつのところ、ネレ高原の魔物のなかで私が倒せるのはゴブリンぐらいだ。だからアルスタットの言っていることは正論だと思う。だけど、ベテランがどんな戦いをするのか見てみたい。それに、頭ごなしに「力不足」と言われて「はい、そうです」と認めるのも癪にさわる。

「自分の命ぐらいは自分で守れる。せやから、私らも一緒にでていかなあ？」

セロイナは私の表情を見て、同じことを考えていると気づいたのだろう。

「だめだ、この防衛線をあずかる者として、無意味な死人は出したくない」

「大丈夫や！ 危なくなったら、このマジブーのセーブ術で逃げたる！」

アルスタットはセロイナの底抜けの明るさに驚いたようだった。それは一瞬だけ言葉を失うほど、アルスタットを戸惑わせたが、すぐ我に返って、大きく首を振った。

「君たちは戦場を知らない」

セロイナはさらに説得を試みたが、アルスタットは幕舎の方へ歩いていく。すると突然アルスタットの前に松明が灯った。アルスタットは反射的に腰元の剣を抜こうとしたが、それより早く、女性の声が聞こえる。

「……うらやましい。こんな戦場に、まるで太陽のように眩しい」
原始的な赤い光に照らされた青白い女性は、眉をしかめて苦しいな表情をしている。

しかし……人間とは思えない美しさを放っていた。というのも、まるで作られたような顔の形、肌のきめ細かさ、黒髪の美しさ。教

科書に載っていたサキュバスなんかより、ずっと妖美だ。

突如あらわれた女性は、固まったアルスタットを通り過ぎて、セロイナの頬に手をあてる。

「……眩しい」

「な、なにを言って……」

セロイナもアルスタットと同じように、ガツチガチに固まっている。もしかしたら、魔法をかけられているのかもしれない。

謎の女性はやや首を傾けたまま、くるりとアルスタットの方を向いて、抱きつくように両肩へ手をまわす。ぶつぶつとアルスタットの耳元でささやくと、風に流されるように闇に消えていった。

いつの間にか、たいまつが彼女の魔法で宙に浮いており、彼女がいなくなった途端、火が消えて地面に落ちた。

「セロイナ、大丈夫？」

「ああ、ぜんぜん平気やけど、マジブーこそ大丈夫？」

言われて、額に手をやると、汗が流れ落ちてきた。まばたきをすると、ひどく目が疲れていることに気がついた。あの圧迫感は何だったのだろう。相手が人間であっても、善悪定かでない以上、いつでもセーブポイントに還れるように警戒したせいなのかもしれない。それが上のレベルの相手であれば、それなりの集中力を必要とするのだろう。警戒するだけでこれほど疲れたのは初めてだった。

「さっきの人って、いったい何者なんですか？」

アルスタットは振り返りもせず、「とりあえず、仲間だ」と言っ

って去っていった。

次の朝、ゴンツ！ という音で目が覚めた。

「何を寝とるんじゃ、早く起きんか！」

上体を起こして周りを見渡すと、かけ布や寝袋がきちんと片付けられている。幕舎にいるのは私とカジだけだった。

みんな早いんだなーと思っただけなら、不意に頭がじわじわと痛み始めた。頭を触ると、直りかけていたコブの上に、なんと新たなコブができていたではないか！

「あーっ！ まさか、寝ている女性に暴力を！ …… あなた、サイッテイですっ！」

「師弟関係に男も女もないわい。弟子が力不足なら喝をいれるまでよ」

私を見下ろしながら、カジは長老のように手で白髭をなぞる。

「いつあなたの門下生になったか教えてください。あと、力不足と評価される理由を納得できるように教えてください。私、あなたをセーブポイントに戻してしまいかもしれません」

カジは目を丸くすると、姿勢を正して丁寧に「ごめんなさい」と頭を下げた。

私の気のせいかもしれないが、長年まがっていた腰が急にまっすぐになったので、カジの背骨がピキッと鳴ったような気がした。

「……納得できません。土下座してください」

「も、もうしわけありません……」

カジのフォームはまるで小川の流れをさせる自然な動きで、土下座の形へ変化する。そのマゾっぷりに、私は舌を巻いた。まさかこの世に、サドな自分を満たしてくれる人間がいたとは。

私はカジの肩に手をあてた。

「カジ、今回はこれで許してあげるわ。でもこれからは、同じ展開を期待しないこと」

「ありがたき……幸せ」

カジはさらに深く頭を下げる。ちょうどそのとき、セロイナが笑顔で幕舎に入ってきた。セロイナは私とカジの姿を目にすると、いったい何がどういふことこんな絵になったのか理解に苦しんだ。そして何も見なかったかのように、静かに幕舎を去っていった。

幕舎の外には総勢11人の男達が門の前に集まっていた。

彼らは軽く体を動かし準備運動をしたり、武器や道具の点検をしている。どうやらそのなかに魔法使いはいないようだった。

俺は魔法使い専門だぜ！ などという冒険者がほとんどいないのは教科書どおりだ。

なぜならば、魔法は接近戦にとても弱いという最大の弱点がある。魔法と集中力は切っても切れない関係にあるが、だいたい5歩以内に敵がいると、敵に集中してしまうのが人間だ。

いつ襲ってくるか分からない敵を前にして、魔力や詠唱に集中するというのは土台無理な話である。だから魔法は戦闘のアシスト的な存在となり、特に遠距離の敵を攻撃する手段として使われる。それゆえ、近距離の魔法を習得しようとする者は相当の魔法マニアだ。白魔法を除く近距離の魔法は、武器が発達する以前の歴史に取り残された古文書のような存在に近い。

彼らベテランは遠魔近武を極めた者たちであり、その装具を見ているだけで勉強になる。

……と、そのベテラン冒険者に混ざって、セロイナが白々しく準備運動をしているではないか。

「なんで準備運動みたいなことをしてるの？」

「ん。ああ……じつは……」

めずらしく他人行儀にセロイナは地面を指差した。

地面にはネレ高原の簡易マップが描かれており、冒険者たちに割り当てられたエリアが記されていた。他の冒険者とは格段に小さいが、マップの端に私たちの名前がある。

私は息をのんで、思わず舞い上がりセロイナに抱きついた。

ギルドメンバーでもない私の名前が、ランク5の冒険者たちと同じマップにあるなんて。なるほど、エントリーされているのに起きてこなかった私を見て、カジは根性なしと思ひ込み、喝を入れたのか。しかし私は知らなかったのだから、筋違いもいいところだ。

早速、私はカジとセロイナをセーブしていると、周りから注目さ

れていることに気づいた。注目されるのは学校でも同じだった。

セーブ術は非常に複雑な魔法で、習得している魔法使いは珍しい。そしてがんばって習得したところで、勇者一行の日陰的な存在になるため、あまり『うまみ』もないわけだ。近接魔法が廃れるのと同じようにセーブ術も廃れ、難儀な魔法になってしまい、かつリターンも少ないわけで、セーブ士のジョブ人口は減少し続けていた。

そんなセーブ術をちらりと見ながらアルスタットが冒険者たちへ声を掛けている。たぶん冒険者全員の士気を鼓舞しているのだろう。最後に私たちのところへ来た。

「準備はできましたか？」

「アルスタットさん、ありがとうございます。どえらい頭の固い人だと思っただけ、胆のでかい男やったんやなあ」

「い、いやあ……そんな」

アルスタットは頭をかいて笑顔になったが、戦場にいることを思い出して真顔になった。

「じつは、彼女がどうしてもあなた方を戦場に、と言ってまして」

アルスタットの視線の先には、昨晚の女性がいた。幕舎の影に座って、地面をぼーっと見ている。

「彼女は どうして 私たちを？」

「さあ。直接聞いてみたらどうですか」

再び彼女を見ると、彼女もじつとこちらを見ていて、目が合ってしまった。やばい！　と思って、すぐに目をそらす。しかしカジは彼女と目を合わせたまま逸らそうともしない。互いにベテラン同士なので、なにか私とは違う、ライバル心みたいなものを感じるのだろうか。

「では、門を開きますよ。まだ魔物は現れていないので、迅速に担当エリアへ向かってください」

アルスタットはを鍔で何度か叩いて抜き取った。木を打つ音が林間を通り抜け、辺りが騒立った。

ドラゴン

私たちが担当するエリアは、すぐそばに谷間が見えるネレ高原の一番端だった。

崖沿いは荒涼としていて、時折谷間から吹きつける強風に膝丈ほどの草が根元からぐにやりと曲がる。魔物たちがやってくるネレ高原の樹海側は、急な坂になっており、まるで鹿の角のような低木が点々としていた。一度足を滑らせたら下まで転がってしまいそうだ。

しかし、下方の霧の向こうではゴブリンたちの下卑た叫び声がかたまして、この急な坂道を着々と登り迫ってきているのが分かった。

すでに他のエリアでは戦いが始まっていた。まるでドラゴンが地ならしをするかのように、大地を伝ってその強力な魔法の余波が伝わってくる。そのなかで最も近いエリアの、あの女性から私は目が離せなかった。

かつて人類の夜明けといわれた古の先人達の時代、人は武器や防具を作り出し、次々と強力な魔物を退治して今の国の原形を創りあげた。今でも多くの人々が先人達に畏敬の念を抱いている。それと同時に、先人達があみ出した戦闘のスタイルやテクニクは、今でもほとんど変わっていない。少なくとも私はそう教わった。

しかし彼女はそうではなかった。

彼女は空中に身を浮かべると、ただただ炎を噴射し続けた。

遠距離、近距離という私の固定概念を覆して、地を這うすべての魔物たちを焦がしていく。その行為はあまりに合理的かつ無慈悲で、私は一瞬恐怖さえ感じた。

炎を浴びたゴブリンは乾燥し切って、土偶のように固まっていく。ゴブリンは土から生まれた魔物で、炎で攻撃してもあまり効果はない。ところが、業火のような炎を浴びると体の水分がすべて蒸発し

て、動かなくなってしまうようだ。動かなくなったゴブリンは、強風に鼻や指を削がれて、風化していく。

太陽を遮りながら少しずつ前進する彼女は、さながら地獄の罪人を罰する女神のようだった。

「よいか、絶対に無茶をするな。無理だと思ったら、アルスタットがおる壁ぎわまで引け。いいか、もしものがあつたら、マジブー頼んだぞ！」

なんでカジにマジブーと呼ばれなくちゃいけないんだ、と思ったが、カジの真剣な表情を見て、つい頷いてしまった。

それに……ほんとのあだ名は「マジセブ」であつて、「マジブー」ではないのだけれど。まあ昔から、セロイナにそう間違つて呼ばれ続けていたのだから、いまさら感が強い。

セロイナとカジは樹海側を向いて、ゴブリンたちの到着を待っていた。私は崖にたたずむ二人の背を見て、さつそく観察を始めた。

これから嵐と戦うかのように、二人は遠くを見て静かに構える。地面をこするような足音が幾重にも重なって、霧から数匹のゴブリンたちが姿を現した。

セロイナは足蹴を主軸として、鬼の形相をした小人のゴブリンを一撃で土に還していく。じつにきれいなフォームで、まるで踊っているようだ。数匹のゴブリンたちがあつという間に、セロイナの演舞に散った。カジも「ほお」と言つて、右手に持っている黒紫檀の杖頭をなでた。

カジの前方にもゴブリンたちが現われ始め、いつの間にか距離を詰めていた。魔法主軸の者にとって、その距離は近すぎるように思える。そもそも、霧という条件や個体数が多い敵に、簡単な魔法では対処できない。カジはいったいどんな戦闘スタイルなのだろうと期待しながら、少し興奮気味にカジを凝視した。

カジは杖を振り上げてゴブリンの脳天に痛烈な一撃をあたえた。そして軽々と杖を片手でまわして、たたみかけるように襲ってくるゴブリンたちを杖の後ろ尻で串刺しにする。一瞬でゴブリンを屠る

と、杖が生き物のように回転して次々に襲いかかるゴ布林たちを塵にしていた。

杖を装備しているカジは魔法使いだと勝手に思い込んでいたが、どうやら肉弾戦の得意な戦士系のような。杖さばきは見事で、十数体のゴ布林を相手にしても、その場から一步も動いていなかった。しかし私としては少々物足りない。

ギルドがジジイになったカジに、ランク5の依頼をお願いするのだから、カジが相当な実力の持ち主だったことは間違いない。だからこそカジの戦闘テクニクには期待をしていたのだが、たしかに技術は高い、しかし隣の美人魔法使いに比べれば、かなり見劣りする。それになんだか効率が悪く、年寄りには激しすぎる動きだ。カジは一気に20体ぐらいのゴ布林を倒すと、息を切らせて杖をついた。

「ひーい、わしも年じゃのう」

悠長にも手ぬぐいを取り出して、額の汗を拭う。

そのとき、3体のゴ布林が霧から現われて、地面を跳ねるようにして向かってきた。カジの目はゴ布林たちを捉えているはずなのだが、まったく手ぬぐいをしまう気配がない。

まさか見えていないのだろうか？

こちらからカジの視線を探ることは難しいが、顔の向きから考えてゴ布林は視界に入っているはずだ。

「カジ！ ゴ布林が正面から来ているよ！」

私は思わず指差して言った。

「ああ、これは心配せんでいいわい。よいか、攻撃してくるゴ布林をよく見ておくんじゃ」

余裕綽々のカジに三体のゴ布林が飛びつくと、何かにぶつかってゴ布林たちは地面に転がった。なにか透明な壁がカジの前にあり、ゴ布林たちはそれに弾き返されたようだ。

もう一度ゴブリンは立ち上がり、カジに攻撃するが、まったく攻撃がとどかない。

「これが魔法の壁、マジックウォールじゃ」

カジは手ぬぐいを丁寧にたたんで懐にしまうと、杖を振り上げ、壁を攻撃するゴブリンたちを右から順番に屠っていく。「魔物の攻撃は弾くが、術者の攻撃は弾かん」

突然カジの目の前が真っ赤な板を張り巡らせたように、一面の炎が広がった。火の弾が霧の中から放たれて、それが魔法の壁にぶち当たったようだ。

上級とまではいかないが、それなりの魔法を使える魔物が霧の中にいる。おそらくゴブリンを統括するリーダーの仕業に違いない。

ゴブリンの襲撃は止んだが、代わりに火の弾がカジを襲う。透明な壁は3回ほど火の弾を浴びたが、まったくの無傷だ。

「魔物の進入を許さず、外からの魔法も効かん」

杖を両手に持ち替えたカジは、見えない壁を杖でゆっくりと前へ押した。そして一歩ずつカジは前進し始める。

「マジックウォールは術者と一緒に移動させることも可能じゃ」

霧の中から放たれる火の弾をガードしながら、ゆっくりと壁を押して霧へ入ると、やがてゴブリンの絶命の声とともに火の弾は止んだ。

霧から出てきたカジは私に杖を向けて、まるで仙人のように重々しく口を開く。

「完全無欠の防御、それが今のおぬしに最も必要なものじゃ」

もし私がああ壁に守られ、安全にセーブ術を駆使できるのならば

セーブ術は今までの常識を覆す魔法になるかもしれない……よう
な気がした。

戦闘が始まってずいぶん時が経っていた。

すでに陽は頭上を通り越して、ネレ高原と眼下に広がる樹海を照らしている。

思わずあくびが出てきそうになり、私は慌てて口を覆った。性懲りもなく延々と登ってくるゴブリンをカジとセロイナは順調に退治していて、たまに現われるゴーレムなどは、カジがセロイナを手伝ってくれるのでセーブ士の出番は全く無かった。

ポイントを満了にするには、いったいどれぐらいのゴブリンを退治すればいいのだろう。ランク5の依頼なのだから、ゴブリンなんて1ポイントに満たないのかもしれない。幕舎に帰ったら、アルスタットに聞いてみよう。おそろしく微小な数値を口にしなければいいのだが。

霧が晴れて、ネレ高原と樹海を結ぶ道がはっきりと見えるようになった。樹海への道はユーリエス側にある獣道と違って、砂利や大きな岩が遥か下界まで続いている。

魔物たちは、赤黒くむき出しになった斜面を何度も滑りきながら登っており、その光景は律儀に倒される順番を待っている行列のようだった。

再びあくびをしながら、ふと隣のエリアをのぞくと、美人魔法使いが少しずつ戦線を引いてきているように感じた。

初見は『なんとなくそうだから』と疑問にさえ思わなかったが、ネレ高原全体をして、違和感を覚えた。

ベテラン冒険者たちが、少しずつネレ高原の中央に集まりつつある。

しかしどの冒険者をみても、何か問題が発生しているようには見えない。それぞれが滞りなく、魔物を退治しているように見えるのだ。

「しまった……！　わしも年をとったか」

カジがそう言った矢先、樹海がざわめいた。私は樹海を見ると、

巨大な影が鳥の群れと一緒に飛び立つ姿を捉えた。

その影は恐ろしい速度でネレ高原を目指して一直線に飛んでくる。
「引くんじゃ！ 茂みに隠れる！」

カジはゴブリンの相手をしながら、ネレ高原の中央に退却を始めた。一方、セロイナはカジより攻め込んでいて、なかなか引くに引けない状況に陥ってしまった。

「セロイナっ、早く、退却して！」

「分かってる！ 分かってるんやけど、ゴ布林が急に……！」

セロイナの相手するゴ布林が突然増えだして、猛烈に飛び掛ってきている。セロイナは少々スタミナが切れ始めていたようで、ゴ布林たちに背を向けて、退却に徹することができなくなっていた。しかしセロイナは慌てることもなく、隙を見ては砂礫の坂道を登って、着々と私の元に近づいてきているようだ。

「間に合わん！ マジブー、セロイナを」

そう叫びながらカジが私に近づいて来た時、風向きが変わった。樹海から飛んできた『何か』は、体に翼を密着させて急激に下降すると、上昇気流に乗って、ネレ高原の上空にその姿を現した。

巨大な翼を広げると、砂塵が舞い上がり、視界を一瞬にして真っ黒にする。そして天高く、おぞましい雄たけびをあげた。

体がまったく動かない。砂嵐のなかで右も左も分からず、人間という生き物の太古の記憶に刻まれた恐怖の雄たけびが、全身をすくみあがらせる。それは体を動かそうとする意思を頭の中から強制排除し、戦う意欲すらも殺ぐ。

視界が晴れると、宙に陽の光を背にした伝説の魔物 ドラゴンが、私とカジを見下ろしていた。

実際に城をみたことはないけれども、たぶん城ぐらいの巨大なドラゴンだ。鱗は血のように赤いが、のどや腹のあたりは白色をしている。あごのあたりは赤と白のまだらで、目には人間のような表情と知性がみてとれた。陽の光を背にして相手を威嚇し、まず力量を測る用心さは、並みの賢さではない。

観察を始めようと一歩踏み出した途端、ドラゴンの口から炎が吐き出され、カジと一緒に炎に包まれた。一瞬早く、カジはマジックウォールを唱えて炎を防いだが、火力が強すぎてマジックウォールまでも包むように、炎が上から回り込んでくる。

それだけではなく、ガラスのような破片が飛び散って、マジックウォールは今にも砕かれてしまいそうだ。

「何をしとるんじゃ、早くセーブポイントに戻らんかい！」

カジは必死にドラゴンの灼熱の息に耐えながら、叫ぶように言った。

「じ、じつは……今回……私自身はセーブしていないんだよー！」

「な、なな、なんじゃとぉー！」

驚愕のカミングアウトに、カジの入れ歯が飛び出しそうになった。私自身は遠く離れた安全地帯にいるから、セーブの必要はないと高をくくっていたのだ。まさに……痛恨のミス。

仮にカジだけをセーブポイントに戻せば、当然ながら私は豚の丸焼きになるわけだ。しかしこのまま二人とも、やられるわけにはいかない。

「なんとかならないの？」

「うむむ。まさか現場復帰早々、こやつと鉢合わせとは……最悪じやのう」

さらに火力は上がる一方だ。おそらくドラゴンが接近してきているのだろう。

と、その時、プレスが弱まり、視野が開けた。

ドラゴンを見上げるとすぐにその理由が分かった。ドラゴンの頭上にセロイナが張りつき、邪魔なセロイナを引き剥がそうとむきになっている。ドラゴンの攻撃に対して、セロイナもチャクラで高めた運動能力を使って、自在に頭の上で逃げ回っていた。

ドラゴンの巨大な右腕が襲いかかると、セロイナは天高く舞い上がり、その右腕に着地する。そして腕を伝って駆け抜けると、ドラゴンの額に強烈な一撃を見舞う。ドラゴンの動きは激しく、もしセ

ロイナが足を踏み外してしまえば、地面にたたきつけられて死んでしまうだろう。

一刻も早くセロイナを救い出さなくてはいけない。

点々とある茂みに身を隠しつつ、カジはドラゴンとの距離を詰めていた。一方の私は、セロイナをセーブポイントに還すべく集中した。しかし激しく動くセロイナに魔力を集中させることが難しい。

「ああっ！ もう！ じっとしてちょうだい！」

焦れば焦るほど、逆に集中できなくなってしまう。

セロイナのチャクラはすぐに切れてしまい、動きは緩慢になってしまった。足元が激動するなか、壁のような腕が左右から攻撃してくるのだ。到底、常人にはかわしきれない。

ほんの僅かだった。

ドラゴンにすれば触れたことすら分らない程度、その爪がセロイナと交錯した。セロイナは右足に傷を負って、足元をすくわれると、鼻の上を滑り落ちた。とにかく両腕をありったけ伸ばして、つかめるものを探すが、ドラゴンの鱗の上を虚しく滑る。

思わず目を背けてしまいそうになった。

セロイナは最後にドラゴンの顎下に生えている髭を両手でつかみ、辛うじて落下はまぬがれた。

良かった！ という安堵の溜息も束の間、ドラゴンはセロイナを振り落とそうと、がむしゃらに頭を動かす。

ドラゴンが動いたびに両腕はじりじりと下がり、とうとう左手が解ける。

そのとき、不意に茂みの中から黒い影が飛び出して、ドラゴン目掛けて走駆する。

クロだ！

クロはドラゴンの後ろ足に爪を突き立てながら、器用に登っている、鱗が覆われていない部分に麻痺作用のある赤い牙を突きたてた。

これにはさすがのドラゴンもターゲットを変えるしかなかった。抵抗して後ろ足を振り回している間、セロイナはなんとか左手を元の位置に戻す。クロは何度かドラゴンに噛み付いたが、それでもドラゴンにとってダメージになっているようには見えない。

しかし、やっと魔法の有効範囲についたカジは、ひっそりとドラゴンの巨体ゆえの死角に潜り込み、強力な魔法を唱えた。

空気を張り割く、鋭い音。

離れている私ですら、耳の中が痺れて、キーンという音しか聞こえない。

無音のなかで、あの巨体を誇るドラゴンが上体を起こしながら痙攣している。そして失われた聴覚が元に戻ると同時に、ドラゴンは横転し、洪水のような音の中に沈んだ。

ドラゴンの動きに耐えられず、セロイナが落下するのが見えた。

力なく、真つ逆さまに落ちていく

私は、ただセロイナの名を呼ぶことしかできなかった。

そこに、あの美人魔法使いが、落下するセロイナを受け止めた。ふわふわと空中を浮遊して、倒れるドラゴンの手足をすり抜けていく。

私はほっと胸をなでおろすと、今度はカジの姿を探す。

カジは倒れたドラゴンをじっと見下ろして、杖を突きつけていた。「これ以上、戦うなら手加減しない」という意味に違いない。ドラゴンは起き上がるやいなや、ひと吼えして、砂嵐とともに去っていた。

カジの過去

ドラゴンが飛び去ったあと、カジは糸が切れたかのように倒れた。私はカジのもとへ走った。セーブポイントに還せばカジは元に戻る。

息を整えて、まず冷静になり、セーブ術を正確に唱えた。突っ伏したままのカジは、汗だくになって右腕を抱えている。

もう一度、正確に唱えた。

ゾッ、と背中に冷たいものが広がる。もう一度　もう一度、唱えよう。気が動転して、詠唱を間違っているはずだ。

アルスタットが飛んできて、カジを仰向けにする。抱えた右腕は炭のように黒い。

「こ、これはいけない！　早く街まで連れていきましょう！」
10回目のセーブ術を唱えると、腕に激痛が走った。杖を拾わなくては

「いったい何をしているんですか！　もうセーブポイントは消えます。セーブ術の唱えても無駄なんです」

……そんなの、知ってる。でも……でも、このままじゃ……！
すっかりしなさい！　とアルスタットが頬を打った。

「いま君がするべきことは、仲間を一刻も早く治療することです。仲間が助かってから、好きなだけ悔いるといい」

胸から溢れ出す感情を何度も飲み込みながら、アルスタットと一緒にカジを持ち上げた。

意識のないカジを幕舎に運ぶと、アルスタットは山から降す手筈をすぐに整えた。

カジは強力すぎる魔法を唱えたせいで、その反動を右腕に受けてしまっていた。魔法使いが魔力を開放した反動で怪我をすることは

稀にあることだけれど、これほどの被害は聞いたことがない。人は誰も、自体がもたないことをしようとする、危険を無意識のうちに感じ取って、結果として力を制限するものだ。それをどのように振り切ったか分からないけど、恐らくカジは、これほどの魔力を開放するのが初めてだったと思う。でも、そうしなければいけないほど、確実に状況は逼迫していた。

あのとき、もし私が自分自身をセーブしていたなら、セロイナをセーブポイントに還すことができていたなら、カジのセーブ効果をもっと長かったら……きっと状況はこれほど悪くはならなかった。それより、もっと悔やんでいることは、やろうと思えばできると勘違いしていたことだ。

危機的状況になれば、きっとできるだろうと信じ込んでいた自分が、今となっては悔しい。そしてそんな絵空事を描いているとき、仲間のことなんて微塵も考えていなかったことに腹が立った。

ユーリエスに着くと、白魔道士たちがいる施設にカジを運び込んだ。

治療のために清潔な白いシーツのベッドへ移送すると、一人の白魔道士が私の腕を優しくつかんだ。

「あとは私たちにまかせてください。……あなたも随分とお疲れのようですね、十分な睡眠と食事が必要です」

彼女の笑みに安堵すると、急激にまぶたが重くなり、体中の力が抜けてしまった。

ドラゴンと対峙するカジの姿でハッと目が覚めた。

断片となって戦いが繰り返され、それが今も頭の中を巡っている。そこが病室であると認識するために、つらい戦闘の結末を反芻し

なければならなかった。

ベッドから上体を起こそうとして手を動かすと、鋭い痛みが指先から首にまで貫通した。しばらく呼吸するのも忘れて全身を硬直させる。

よく見ると右腕から掌まで何重にも包帯が巻かれ、改めてその一枚一枚の布切れが鋼鉄のような重さに感じた。

もう一方の手でなんとか起き上がると、集団用の病室を出て、肌着のまま廊下を歩く。

妙に静かで、聞こえるのは鳥たちのささやきと、建物の軋む音だけだ。中庭は暗く、あのドラゴンを模写したような、西陽を照り返す雲が立ち昇っている。

向かいの廊下から僧のような格好をした白魔道士が部屋から出てくると、私を見つけて、小走りで近寄ってきた。

「歩けるほど元気になれましたか」

柔和な笑みと少しの驚きを見せた白魔道士は、カジを運び込んだときに見覚えのある顔だった。

「……カジは？」

と、言っただつたが、風が通り抜けるような音しか発せず、言葉になっていない。しかし白魔道士は何を聞いているのか察したらしく、傾いた自分の影に目を逸らして表情を曇らせた。

「なんとか一命は取り留めました、今はまだ分かりません」

「そう、ですか……」

「何はともあれ、あなたも傷を負っているのですから、まずは自分の怪我を治すことに専念してください。すぐに温かい食事を用意します」

白魔道士に促されて病室に戻ろうとするとき、ふと大切なことを思い出した。

「あの……私たちの仲間で、金髪の女性はどこにいますか？」

「うーん。金髪の女性……分かりません。あの時は、黒髪の長い女

性とあなたと、カジ・アルゼナさんだけだったはずです」

黒髪の女性は、まだ名前すら聞いていない美人魔法使いに間違いない。彼女はカジを運ぶときに自ら進んで加勢してくれた。担架を宙に浮かしてくれることで急な斜面を難なく降りることができ、一夜でユーリエスまで戻れたのは彼女のおかげだ。彼女には何度もお礼を言ったが、改めてちゃんと話がしたい。しかしそれよりも、セロイナのが気になる。

食事をとったら、ベッドを抜け出してセロイナを探そう。そしてカジの様子も見なければ。

何の味もしない食事を終えると、白魔道士が肩に触れた。すると、また急激な睡魔が襲ってきた。

目の回るような夢をみた。まるで毛糸の玉のように闇の中を転がされる夢だ。

身も心も疲弊すると、地面に息ができないくらい押し付けられる。どうやらこれは、昔の記憶のようだ。

抵抗しなければ、安楽の死が待っている。もちろんそのときは、『安らぎ』なんて素晴らしいアイディアは思いつかない。死はその局面にあたってみなければ、分からないものだ。今でさえ、いざ死を前にしてどちらを選ぶか分からない。

魔物は頭を垂れて、抵抗する私を探るとまた地面へこすりつけるように踏み転がす。そうやって、執拗に何度も何度も同じことを繰り返したが、幼い私は、不思議と死に対して疎く、何度も何度も抵抗した。やがて体力が尽き、あがこうとも腕は上がらず、鼻は泥で詰まり、このまま土に埋もれてしまうのではないかと思った。そのとき、ふと、頭にのっていた魔物の足が軽くなった。

私はやつのことで身を返して仰向けになると、泥が口の中に入るのも構わず、打ち揚げられた魚のように息をした。

誰かが私をゆっくりと起き上がらせて、顔の泥を拭い落とす。

「苦しかったでしょう……遅くなって、ごめんなさい」

目を開けると、心配そうに私を見つめる伝説のセーブ士アルゼナがいた。幼い私はアルゼナ様のことなど知りもせず、その人を女神だと勝手に信じた。

「さあ、一緒に帰りましょう」

アルゼナ様はまるで母のように、泥だらけの私を優しく抱き上げた。

魔物の気配はなかった。ふと周りが明るくなると、アルゼナの顔はぼやけて、あの白魔道士の顔と重なった。

「ああ！ よかった！ やっとお目覚めになれましたか！」

白魔道士は胸に手をあてて、一気に捲したてた。

「どこか体が痛んだりしてませんか？ 関節や胸への圧迫感はありませんか？ ああ！ それより麻痺が残っていないか確かめましょう！」

言い終わらないうちに駆け足で部屋を出て行く。私はシーンと静まった病室で呆然とした。

「麻痺の魔法が強すぎたみたいじゃな」

懐かしい声、とも思わないが、なんだか嬉しくなるような声がすると、廊下から杖をつきながらカジが現われた。

「カジ！ 良かった！」

と思つたのも束の間、カジには大きく何かが欠けていた。

右腕がない。

カジは一度、につこり笑うと、杖を振り回した。

「良くないわい！ あのヘビのせいで右腕をなくしてしまったわい」
大儀そうに横に座ると、炭のように黒くなった杖の柄を撫でた。

「あ、あの……、本当に、ごめんなさい」

私は何を言ってるんだろう？ そんな言葉、いったい何の意味があるのだろう？

シートを固く握りしめて、ただ私には頭を下げることしかできなかった。そして自分の無力を呪った。

カジの左手が私の肩を叩く。

「いや、今回の件は、わしが悪いんじゃない」

慰めなんていらぬ。私が役割を果たせなかったことは明白なんだから。

「私が悪いの。……セーブ術が使えるっただけで、他の人とは違う存在だって思っていた。セーブ術を覚えただけで、そこから全然、全然努力しなかった……。あの戦いで、私はセーブ術さえ普通に使えなかったの。みんなと違う、私の唯一の取柄なのに、何ひとつ、できなかった。だから、私だけが、悪いの」

シートに涙がパタパタと落ちた。横でカジの座っている椅子がギシリと沈んだ。

「うむー。わしの弟子の話をしようかのう」

「……え？」

「まあ、聞きなさい。少し前にとんでもない才能を秘めた弟子がおつてな。名をシスという」

「シス？ シス・アルゼナのことを言っているの？」

カジは口の端を上げて、不敵に笑う。

「シスもおぬしらと同じように、わしと一緒にギルドの依頼を引き受けて、魔物と戦ったりした。そしてすぐに分かった。こいつは磨けばベテランになると。あと、超べっぴんになるということもな」

「……」

「……まあ、それはいいとして……。わしはあの子を鍛えたよ。他

にも鍛える奴はいたが、シスには特に力を入れて育てた。その結果、見事に魔王を倒した」

「本当に、カジがシスの師匠なの？」

「そのことが、ふかーく、ふかーく件の話と繋がっておつてな。あのドラゴンはシスの手下なんじゃ」

「？……アルゼナ様の手下？」

言ってる意味が全く分からない。というか、なんでこんな話になったのかさえ分からない。さっきまで、私はすごい後悔をして、泣いていたというのに、すっかりカジのペースにのまれている。

「まあ、手下というアレじゃがな。シスが乗ってた、あの、なんじゃったかの？」

「ロギネスのことを言っているの？」

「それぞれ、ロギネス。ロギネスが、あのドラゴン」

「……………」

「……………」

「ええーっ！？」

私は右腕の痛みなんか忘れて、カジに迫った。

「なかなか良いリアクションじゃのう。ふごふご」

「なんでそれを教えてくれなかったのよ！」

「じゃから、謝っておるではないか。わしはミステリアスな感じで行きたかったんじゃよ」

「ああっ、もう、ウザイ……ちょっと待って、整理させてちょうだい」

カジの言うことが本当ならば、アルゼナ様はカジの弟子で、魔王を倒すときに従えたドラゴン（ロギネス）を使って、師匠を襲わせたということになる。

私は懷から金貨を取り出した。金貨に彫られているロギネスの姿は、たしかにそっくりだ。

「どうして、そんなことをさせたの？」

「分かん」

思わず手が滑って、危うくベッドから落ちそうになる。

「分からんが……心当たりはある」

随分と前の話になる。まだわしが弟子を育てていたときの頃じゃからな。

その頃はまさにセントロイスを拠点にして、勇者の従者となるベキ子供たちを育てておつてな。そうそう、なかなか周りからも慕われておつて、賢者カジなんか言われていたんじゃよ。……いや、嘘じゃないぞ。まあ、証拠は何一つないがの。

わしの弟子であるシスが勇者フォーレンと共に魔王を打ち破ったころじゃ、なんとそこに当のフォーレンが訪ねてきた。

わしなんぞを訪ねてきた理由を聞くと、フォーレンはシスを探しておつてな、魔王を倒してからシスが行方知れずだという。わしも愛弟子のためならと思つて、フォーレンとシス探しの旅にでた。

街を巡り巡つてシスの痕跡を辿り、行き着いた場所は　魔王城じゃった。

理由は分からん。なんせ、わしはシスと話すことはおろか、暗闇のなかで玉座にすわる女性しか見ておらんからな。じゃが、集めた情報から奴がシスであることは確かじゃ。

フォーレンと共に戦ったが、奴は大勢の魔物を率いて、わしらは全く歯が立たなかった。あの魔王を倒したフォーレンでさえも、シスのセーブ術と魔物の群れには為す術がなかった。

それ以来、わしは弟子をとるのをやめた。まさかわしが次の魔王を育てていたなんて、冗談でもひどい話じゃ。

全てが無意味に思えてのう、ユーリエスの片田舎に身を隠したというわけじゃ。

じゃが、わしは一つだけどうしても知りたいことがあつてな。それは、シスが魔王になった本当の理由じゃ。

その望みがあつたからこそ、シスと対等に戦える人間を、心のどこかで探していたのかもしれんな。

「……」

「わしの不始末じゃ。おぬしが才能を気に病むな」

頭を下げるカジを見ても、自分を責める気持ちは変わらない。右腕を失ってまで頭を下げるカジの気持ちは、いったいどんなだろう。

「さて。それで、どうするんじゃ？ ……ギルドはあきらめるか？」

カジの慧眼には光が漲っていた。

「あきらめるわけ、ないじゃないの」

「よし」

カジは軽快に膝を打つと、椅子から立ち上がった。

「食事をとったら庭に出てきなさい。ああ……それと、叔母さんも心配しとったぞ。宿に顔を出してきたらどうじゃ？」

カジが部屋を出る代わりに、白魔道士が先の尖った金属の棒を持ってきた。そして私の足をつかみ上げると、興奮しながら早口で言う。

「痛いと思ったら、痛いと言ってくださいねっ！」

その様相に私は困惑と恐怖のあまり凍りつく。白魔道士は金属の棒で足をグサリと刺した。

当然ながら、私は言葉にならない悲鳴を上げた。流血はしなかったものの、足にはその金属の棒の残痕がある。

すると、白魔道士はもう片方の足をつかんだ。間断なく次の衝撃が襲ってくる。足から頭の頂点まで貫く鋭い痛みは、全身の筋肉が硬直し、反射的に足で宙を蹴り上げるのだ。私はまたしても悲鳴を上げた。

手際よく全身を蜂の巣にしてくれると、急にお腹が空いて、なぜか生き返ったような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6528y/>

セーブをお望みですか？

2011年11月23日13時49分発行